

第214回 番組審議会

1. 日 時 平成24年7月10日(火) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 3F「星雲 東の間」
3. 委 員 委員総数 12名
出席委員数 8名(欠席委員数 4名)

○ 出席委員(敬称略)

中村 慶久(委員長)

竹中 陽一(副委員長)

—以下50音順—

東海林 千秋

菅原 正二

原 圭介

村上 幸子

役重 真喜子

吉田 浩次

○ 会社側出席者(7名)

佐藤 滋樹(代表取締役社長)

小原 忍(専務取締役)

藤澤 利憲(常務取締役)

前田 秀男(取締役編成技術局長)

藤原 銀司(取締役営業局長)

君沢 温(編成業務局編成部長)

佐藤 文吉(報道局報道部大船渡支局)

○ 事務局 村田 重昭、佐々木久仁子

4. 議題

FNS第21回ドキュメンタリー大賞 ノミネート作品
ちいさな雪だるま ～3.11 悲しみを抱えた親たちの日々～
平成24年5月26日(土) 16:30～17:25放送

5. 議事概要

今回は5月26日(土)の午後に放送した「FNS第21回ドキュメンタリー大賞 ノミネート作品 ちいさな雪だるま ～3.11 悲しみを抱えた親たちの日々～」を審議しました。議事の概要は以下の通りです。

● 岩手めんこいテレビ 君沢プロデューサーの説明

- ・ 「FNSドキュメンタリー大賞」に震災関連の番組を出品するのは去年の「浜からの証言」に続いて2回目。継続して全国に発信できることから今回も「震災」をテーマに選んだ。
- ・ 制作を担当した佐藤記者は、めんこいテレビ開局以来20有余年にわたり大船渡支局で取材にあたってきた。震災時も発災直後から大船渡の津波来襲の映像を撮影し全国で最初に大船渡の津波の映像を放送した。今回のドキュメンタリーで思いの丈を全て出してほしいと依頼した。
- ・ テーマを何にするか情報や課題が多く絞り込みに苦労したが、お子さんを亡くされた3組の親御さん取材し「あの時から時間が止まったままの親、人間の姿を伝える」という視点で番組を制作した。

● 岩手めんこいテレビ 佐藤ディレクターの説明

- ・ 震災から這い上がろうとしている姿や復興した姿ばかりをマスメディアは伝えているが、本当にそうなのかという疑問から、「被災地の人の心の奥底に迫ろう」という思いで、この番組を制作した。

- ・取材にあたり、人間関係を築くことに時間がかかった。相手の心がほぐれてくるまでカメラを回さなかった。画質の良い大きなカメラで取材することはせず、小さなハンディカメラで取材した。何度も通っているうちに「あなた達の趣旨なら自由に撮っていい」と言われたが、それは最後の頃だった。
- ・被災者と同じ気持ちになって同じ悲しみを共有しなければ、この取材はできなかった。カメラマンが途中で泣き出し、ピントがボケてしまった映像もあったが、それでいいだろうとそのまま使った。
- ・この番組を通して「被災者の気持ちは前に進んでいない。止まったままだ」ということを伝えたかった。

●出席委員からの意見・感想

- ・丁寧な番組で非常に感動した。
- ・取材相手ときちっと人間関係を作った上で話を聞いていることが番組全体に浸透していた。
- ・声高に震災の悲惨さを発信するのではなく腰を落ちつけて地元の等身大の悲しさを発信することが本当の被災地の理解につながる。
- ・上手く作ろうとせずジャーナリスティックなものに徹するという考え方がよかった。
- ・見ているのは辛かったが、抑制の効いた静かな良いドキュメンタリー。論評を加えず、事実を淡々と伝える内容に好感が持てた。
- ・村上弘明さんのナレーションが、映像と番組に溶け込んでいて良かった。

- ・ 子供に先立たれた親の表情が、画面を通してうまく映し出されていた。
- ・ ナレーションやインタビューを無理に入れなくてもよいところがあった。
- ・ インタビューのアップが続くので、見ていて辛いものがあった。少し引いた映像を所どころに入れると和らぐのではないか。
- ・ 震災前の映像には取材日をテロップで入れるなど明確にした方が親切だった。
- ・ 震災の記録は、津波の映像や被害の状況が中心になるが、このような不幸を背負った人々の思いも記録してほしい。

6. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置
特になし

7. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

- * 平成24年7月11日（水） 産経新聞 東北版
- * 平成24年7月21日（土） 午前4時30分から4時45分まで「めんこいテレビ批評」内で放送
- * 据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

8. その他の参考事項
特になし